

# 丹後物狂

世阿弥作

前

シテ

岩井某

トモ

従者

ワキ

筑紫の人

ヲカシ

里人

子方

花松

後

シテ

前に同じ。

ワキ

前に同じ。

子方

前に同じ。

地は

丹後

季は

雑

シテ詞

「是は丹後の国白糸の浜に。岩井の何某と申す者に  
て候。我いまだ子を持たず候ふ間。橋立の文珠に  
一七日参籠申し。祈誓仕り候へば。或夜の霊夢に。  
松の枝に花を添へて給はると見て。程なく男子を  
まうけて候。御霊夢に任せ。名をも花松と付け申  
し候。又学問の爲めに。あたりちかき成相寺と申  
す山寺に上せ置きて候。久しく対面せず候ふ程に。  
寺より呼び下して候。此方へ呼び出だし学問の様

をも尋ねばやと存じ候。いかに誰かある。

トモ 「御前に候。

シテ 「花松を寺より呼び下せよと申しつるが下りて有る  
か。

トモ 「さん候はやゆふべ是へ御下りにて候。

シテ 「何とて某には申さぬぞ。

トモ 「ゆふべは御酒氣に御座候ひつる間。さて申し入れ  
ず候。

シテ「実にくゆふべはちと酔ひて候ふよ。さらば花松  
を是へ呼び候へ。」

トモ「畏つて候。いかに花松殿。御前へ御参り候へ。」

シテ「久しく見候はねば拔群に成人して候。いかに花松。  
汝を寺より呼び下す事余の義にあらず。学問をば  
なんぼう御きはめ候ふぞ。」

子「我学問の奥義は知らず。経論聖教は申すに及ばず。  
歌道の草子八代集。習ひ覚えて候。たゞし法華に

は法師品。又内典には俱舍論のうち。七巻いまだ  
覚えず候。

シテ「是はねんなう覚えて候。又花松が学問の事は申す  
に及ばず。又ことなる事に何事か能のある。」

トモ「さゝら八撥が御上手にて候。」

シテ「やあかしましそれは汝が子の事にてあるか。」

トモ「いや花松殿の御事にて候。」

シテ「是は誠か。やあ花松心をしづめて聞き候へ。それ

児の能には歌連歌の事は申すに及ばず。鞠小弓などまでは子細なし。さゝら八撥など申す事は。鉾のもとにて囃す京わらんべのわざにてこそ候へ。学問のやうを尋ぬる処に。法華経には法師品。又俱舎論のうち七卷覚えぬと承る。其さゝら八撥のひまに。など七卷をば覚えぬぞ。いや／＼言葉おほきものは品すくなし。総じて今日よりは某が子にては有るまじいぞとよ。急いで立てとこそ。い

やく／＼得罷り立ち候ふまじ。某罷り立てうずるにて候。(中入)

ワキ、子次第 「旅に雪間を道として。く。我古里に帰らん。

ワキ詞 「かやうに候ふ者は。筑紫彦山の麓に住居仕る者にて候。又是に御座候ふ御方は。我一とせ丹後の国に上り候ひし時。橋立の浦に御身を投げさせ給ひしを。取り上げ助け申し筑紫に下り。彦山に登せ置き候ふ処に。利根第一の人にて。今は学問の奥

儀を御極め候。又ある日のつれづれに。我は丹後の国白糸の浜に。岩井の何某と申し、人の只独子にて御座候ふが。かやうくさる子細により此国に御下り候。今一度本国に帰り。父母の御行方を御尋ねありたき由仰せられ候ふ程に。我等御供申し。唯今丹後の国白糸の浜へと急ぎ候。はるぐの御旅にて候へども。父母に御対面あるべく候ふ間。御心安く御急ぎあらうずるにて候。日をかさ

ねて急ぎ候ふ間。程なう白糸の浜に着きて候。是に暫く御待ち候へ。父母の御在所を尋ねまらせうずるにて候。いかに此あたりの人のわたり候ふか。

ヲカシ「誰にて渡り候ふぞ。

ワキ「此処に岩井殿と申す人の御座候ふか。

ヲカシ「さん候。此処は岩井殿の御在処にて候へども去る事あつて。今は夫婦共に此処には御座なく候。

ワキ 「それは何と申したる事にて候ふぞ。

ヲカシ 「一子を失ひ夫婦共に行がた知らずなり給ひて候。

ワキ 「言語道断の事にて候。いかに申し候。岩井殿の事を尋ね申して候へば。夫婦共に此処には御座なきよし申し候。実にく御落涙尤にて候。しからば父母の御為めに。此文珠堂にて一七日御説法あらうずるにて候。若しいまだ此世に御座候はゞ御逆修ともなり候ふべし。急いで御説法候へ。いかに

此あたりの人々。貴き知識の文珠堂にて一七日御説法候ふぞ皆々御参り候へ。

後ジテ

「物に狂ふも五臓故。脈のさわぎと覚えたり。春の脈は弓に弦をかくるが如く狂ふにぞ。ありかも匂ひもなつかしき。咲き乱れたる花どもの。物言ふことはなけれども。けいやうげきして影くちびるをうごかせば。花の物いふは道理なり。如何に花松々々。なふくそなたへ年よはひ十四五ばかりな

る児や迷ひ行き候ひし。何そなたへも見えぬとや。  
あらふしぎや。我子の花松は。寺にも見えず里に  
もなし。さていづくへ行きて候ふぞ。あら何とも  
なや。総じて親の子を思ふ程かたくなゝる物は候  
はじ。我子の花松を寺より呼び下し学問の様を尋  
ねしに。そんじやう其文々習ひ覚えたと申す。  
父が悦喜此事なりしに。よしなきものゝ候ひて。  
あの児こそさゝら八撥の上手と申す。児の能にさゝ

ら八撥と申すがちと心にかゝりて。あらくと叱  
りて候へば。をさな心にもあらなさけなや。たま  
く寺より下りたるものと思ひ。父を恨み此橋  
立の海に身を投ぐる。酔ひさめてあわてさわぎ行  
き見れども。前世の事にや死骸をだにも見候はで。  
かやうに狂ひめぐり候。其時は恨めしかりしさゝ  
ら八撥も。今は我子のかたみと思へば。なつかし  
うこそ候へとよ。あら我子恋しや。あら我子こひ

しや。何文珠堂にて説法のあると申すか。そと参りて聴聞申し候はん。

ワキ「しばらく。狂人にてある間。御説法の場へは叶ふまじきぞ。

シテ「仰尤にて候へども。物狂も思ふ筋目と申す事の候へば。御説法の間は狂ひ候ふまじ。

ワキ「さらば此所にて静に聴聞申し候へ。いかに申し候。はやことごとく聴衆も参りて候。急いで御説法を

御初めあらうずるにて候。

子「既に時刻になりしかば。導師高座にあがり。発願の鉦うちならし。謹み敬つて白す。一代教主釈迦牟尼宝号。三世の諸仏。十方の薩埵に申してまうさく。総神分に阿弥陀仏名。

シテ「阿弥陀南無阿弥陀。

地「阿弥陀南無阿弥陀仏と。狂ひながら申さば。逆縁なりと浮まん。



ワキ詞「さらばこそ狂ふまじきと申しつるが。狂うて説法の座敷をばつと醒まいて候。かゝる思ふ事もなげなる物狂ひこそなけれ。

シテ「何おもふことなげなる物ぐるひとや。

ワキ「さておもふ事なげなる物狂ひよ。

シテ「あう面白しく。お叱りあらば只も御叱りなうて思ふ事なしとは。此橋立をよむ歌か。

地「おもふ事。く。なくてや見ましよざの海の。天

の橋立都なりせば。都鳥と申すは。在中将の筆の跡。子をよめる歌なり。我等も子のとぶらひにや。

南無阿弥陀仏。

ワキ「いかに狂人。我等も子の弔ひと申すが。導師の御耳にさはりて候。先づ狂人の身のいにしへを申し候へ。其後導師の身のいにしへを。因縁説法に御語りあつて聞かせられうずるにてあるぞ。急いで物語申し候へ。

シテクリ 「それ親の子をおもふ事。人倫にかぎらず。

地 「焼野の雉夜の鶴。梁の燕に至るまで。子故命を捨つるなり。

サシ 「我等もゝとは此国の。近きあたりに住みしなり。

地 「わざと其名は申すまじ。子のなき事を歎き。かの御本尊に祈りをかけ。ひとりの男子を設くる。

シテ 「たまく相生す一子なれば。

地 「かざしの花たなごゝろの玉。袖上の蓮華と。又

たぐひなきあまりに。にくまざるに叱り。おもはざるに勘当せしは。これぞ狂乱の始めなる。

クセ 「子は幼き心に。諫むるをば知らずして。誠に憎むぞと心得。夜にまぎれて家を出で。かの橋立に立ちわたり。浦の波間に身を投ぐる。父母後悔千万にて。せめて変れる姿をも。相見ばやと思ひて。はてし所を尋ねれども。うたかたの。波間に消てあともなし。思ひのあまりに。心空にあくがれて。

狂人となりぬれば。夫婦共に家を出で。国をめぐりて尋ねれど。其面影のなければ。いと涙も古里に。二たび立ち帰りて。此橋立に参りつゝ。

シテ「うらめしの御本尊や。

地「かほどに縁のなき子をば。何しにたび給ふぞと。故もなき文珠に。向ひて恨みかこちて。せめて我子の沈みし。一つ所に身を投げて。浄土の縁となりなんと。思ひ切りたる我等なり。導師もあはれ

みて。我跡とひてたび給へ。

ワキ詞「いかに申し候。さらば急いで因縁説法を御述べあらうずるにて候。

子「当国のうち白糸の浜に。岩井の何某と申す人の候ひけるが。ひとりの子を持ち。すこし学問に疎しとて勘当せられし程に。父を恨み此海に身をなげし所を。折節筑紫舟の船頭取り上げ。筑紫に下り彦山に登り。学問の奥儀を極め。又此国に帰りて

問へば。父母の行方知らずと申す程に。親の爲めに七日の説法を述べ。其後身を投げ空しくなるべしと。思ひ切りたるは。此法師が身の上にて候。  
シテ「あれは我子の花松と。いはまほしくは思へども。姿に恥ぢてかなはず。

22

子「よくく見れば面影の。其いにしへにたがはねば。講座の上をこぼれ落つ。

シテ「あれは我子か。

子「父御前か。

地「実に面影の花松かとて。抱きあひて倒れ伏す。さてあるべきにあらざれば。く。我古里に立ちかへり。もとのごとくに栄えけり。是も思へば橋立の。大聖文珠の利生なり。く。

23